

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：87106

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01214

研究課題名(和文) 東南アジアにおける聖地誕生の諸相：古代から近世にいたる仏教文化交流網の研究

研究課題名(英文) The Birth of Sacred Places in Southeast Asia: A Study of the Buddhist Cultural Exchange Network from antiquity to early modernity

研究代表者

小泉 恵英 (Koizumi, Yoshihide)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・未登録・副館長

研究者番号：40205315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：インドの仏教聖地がどのように東南アジアで受容されたかについて、仏足跡とボードガヤー式聖地に焦点を当てて調査した。上座部仏教が受容されたミャンマー(バガン王朝)やタイ(スコタイ王朝)では、釈迦の聖蹟を模した疑似的な仏教聖地が成立した。スリランカとミャンマーに影響を受けたタイの仏足跡の調査では、先行研究に対して新たな知見を示した。また、アユタヤー王朝におけるタイ国内での新たな仏教聖地の創出と王族の信仰、続くラタナコーシン王朝におけるその信仰の継承についても考察した。ボードガヤー出土の仏足跡、同地に造営された大精舎の小型模型の調査では、意匠や様式の点でミャンマー(バガン)との関連を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ブツダの象徴として信仰されてきた仏足跡が、上座部仏教の東南アジアへの伝播とともにタイで受容された背景として、タイの諸王朝が王権の正統性を誇示するために仏教信仰を利用したことを指摘した。また、スコタイ王朝からアユタヤー王朝、ラタナコーシン王朝に至る仏足跡受容のあり方を時代毎に特徴を捉え、各時代の王権と仏足跡信仰の様相を示した。ブツダ成道の地ボードガヤーの大精舎の擬似聖地化については、同精舎を模した小型模型の調査により、ミャンマー(バガン)との関連、影響関係について考察した。

研究成果の概要(英文)：We investigated how Indian Buddhist sacred sites were received in Southeast Asia, focusing on the Buddha's footprints and Bodhgaya sacred sites. When Theravada Buddhism was accepted in Myanmar (Bagan) and Thailand (Sukhothai), pseudo-Buddhist sacred sites were established in both countries. After the research of the footprint of Buddha in Thailand influenced by Sri Lanka and Myanmar, we revealed new categorizations of the footprints. We also studied the creation of a new Buddhist sacred site in Thailand during the Ayutthaya dynasty, its worship by the royal family, and the continuation of the faith during the Rattanakosin dynasty. Our investigation of the footprints of the Buddha found in Bodh Gaya and a small model of the large temple built there pointed out a close relationship with Myanmar (Bagan) in terms of its design and style.

研究分野：仏教美術史

キーワード：仏足跡 タイ スコタイ アユタヤー ラタナコーシン ボードガヤー スリランカ 王権

1. 研究開始当初の背景

東南アジアにおける仏教の擬似聖地の成立と展開を考察する本研究の歴史的背景には、インド仏教の衰退と東南アジアでの上座部仏教の受容とがある。本研究で着目する仏足跡とそれを安置する聖地(聖山)の思想は、上座部仏教の信仰されたスリランカで大いに発達を遂げ、それが東南アジアへ伝播した。ほぼ時を同じくして、インドにおける巡礼の重要な聖地の一つであるボードガヤーの衰退を端緒として、擬似ボードガヤー信仰が東南アジアで展開していく。東南アジア地域において、2種類の聖地が異なる理由によって成立、展開したのである。本研究ではこれらの事象について、インド、スリランカ、東南アジアの全体を俯瞰的に捉えることをめざした。

仏足跡信仰の先行研究としては、古代インド、タイ、ミャンマー(バガン)のそれぞれについての研究に加え、ミャンマー、タイで展開した108の吉祥図像の内容や配置、図像構成、図像と経典との関連などが考えられてきた。しかし、紹介されている作例の地域や時代が限定されていたり、あるいは個別の作品の年代観が、研究者によって従来の見解と大きなズレがあるなど、評価には慎重さが求められる。

ボードガヤー信仰については、釈迦成道の地であるインドの仏教聖地ボードガヤーの大精舎を模して、ミャンマーやタイで新たにボードガヤー式寺院が建造された。この擬似聖地への巡礼や、本地たるインドのボードガヤーの衰退については、さまざまな研究成果がある。しかし、擬似聖地の成立以後の信仰という視点での研究は必ずしも多くない。

本研究は、東南アジアに展開した2種類の仏教聖地、すなわちスリランカへの憧憬から生み出された仏足跡信仰に伴う聖地、インドでの仏教衰退によって必要となった新たな巡礼地としての疑似ボードガヤーを合わせ見ることによって、上座部仏教を主流とする東南アジア地域での聖地信仰および巡礼の展開をたどってみようというものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、インドやスリランカの影響を受けつつ、東南アジアにおいて新たに生み出された仏教聖地の信仰とその展開の様相を、「仏足跡信仰」と「ボードガヤー式寺院」という主に2つの事象に注目して、現存する遺物の制作時期などの見直しを含めた資料の再評価、南アジアおよび東南アジアにおける文化交流と歴史的展開を包括的に捉えることにある。

その手段として、南アジアと東南アジア諸国を交易という視点によって見直すとともに、東南アジア諸王朝の宗教的動向と政治的動向を相互に関連するものとして位置づけていく。宗教的な変容とその背景にある国際社会の状況を合わせ見ることで、聖地信仰の実際を歴史的に捉えようとする。

まず仏足跡は、古代初期のインドやスリランカにおいてその表現は比較的単純であったが、東南アジアで本格的に上座部仏教が導入されて以後、その造形は複雑化する。一般的に108の吉祥文様を配置するのが通例となり、加えて須弥山を中心とする仏教的な世界観や宇宙観を反映して、これらの要素を複合して造形化するようになる。タイのスコタイ時代以後の作例がこれにあたる。こうした作品の様式的研究を行ない、編年観を確立し、基礎資料としての仏足跡を再整理したい。

次に「ボードガヤー式寺院」については、新たに造営された地の宗教的な重要性のみならず、巡礼という人の流れに伴って生じるさまざまな影響なども考慮しながら、聖地誕生の状況を把握していくことを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、スコタイ時代以後、仏足跡信仰や聖地信仰が発達したタイを中心に、その源流となるインド、スリランカ、タイと並んで上座部仏教が展開したミャンマーを調査の対象地域とする。具体的には、各地で制作された仏足跡とボードガヤー式寺院に関連する遺物を調査し、考古学、美術史学の基礎データを収集する。調査は、実測、図像学的分析、形式分類、当初(オリジナル)の造形、形状的な確かな把握を目指す。

また、対象地域の歴史および仏教聖地に関連する文献を整理する。仏足跡に加え、仏教の世界観の図様に言及する仏典、ミャンマーやタイ(シャム)の年代記、史書などを対象とする。

現地調査による知見と文献資料研究とを照合した図像学的研究の成果を、定期的に研究会を開催して共有し、蓄積された基礎データを公開し、今後の研究に資する。

4. 研究成果

調査初年の2020年、世界的規模でのコロナ禍が起これ、以後2年間海外渡航の制約を受けた。このような海外事情等により、2023年度まで交付金を繰り越した。また、調査対象国の政情不安定の問題などにより、当初計画していたインド、スリランカ、タイ、ミャンマーの主要4カ国

のうち、スリランカとミャンマーの現地調査が叶わず、タイとインドでの調査を中心に実施した。海外調査は、2022年度(タイ2回、インド1回、イギリス1回)、2023年度(タイ1回、韓国1回)実施した。国内では研究会を、2020年度(1回)、2021年度(1回)、2022年度(3回)、2023年度(2回)開催した。

仏足跡の調査作品は、合計48件にのぼる。個別の作品の法量、材質、安置状況などの基礎データを取り、108の吉祥文様を有するものについては、保存状態によって図像の判別が困難なものも多かったが、できる限りの同定を試みた。調査地は、シーサッチャナーライ、スコータイ、ロップリー、サラブリー、アユタヤー、バンコク、ペッチャブリー他。調査作品の制作時期は10世紀以前に遡るものから、スコータイ、アユタヤー、ラタナコーシンの各王朝まで幅広く、また文様の構成や配置でいくつかのグループに分けられる。スコータイ王朝以後の仏足跡は108の吉祥文様を持つものが一般化し、その配置がグリッド形と大型法輪形の2つに大別される。本調査では、「文様なし」「グリッド」「リタイ王の仏足跡」「スコータイ、グリッド形」「アユタヤー、グリッド形」「グリッド形(メダイヨン)」「大型法輪」「大型法輪+グリッド形」「サラブリー」「サラブリー系」「サラブリー系2(踵湾曲)」「サラブリー系3(仏足跡+仏影)」「過去四仏」「涅槃仏足裏」「経筆筭」「岩にうがつ」といった内容で暫定的に分類整理した。

スコータイ王朝では、スリランカへの憧憬から、彼の地の仏足跡を写してスコータイの王都やその周辺にスリランカを模した仏足跡が作られ、そこが聖地化された。しかしながら、現在のスリランカには、タイやミャンマーで見られるような108の吉祥文様を持つ仏足跡の現存例は発見されていない。一方で、ミャンマーではバガン王朝にグリッド形に108の吉祥文様を配する仏足跡が登場しており、こうした形式の仏足跡の成立とその源流については、なお未解決のことが多い。

アユタヤー王朝になると、タイ国内にブッダにまつわる擬似的でない直接の聖地が存在するとの伝承が生まれた。この聖地がサラブリーであり、同王朝の歴代王はこの新たな聖地への巡礼を繰り返した。その行為は単に宗教的な動機からではなく、王権の正統性を民衆や諸外国の使節へ誇示するためにも重要なものであった。

つづくラタナコーシン王朝では、アユタヤー王朝に聖地化されたサラブリーを模した擬似聖地が王都バンコクに作られるようになる。また、サラブリーで行なわれた仏足跡と仏影をセットにした信仰もラタナコーシン王朝に引き継がれ、仏足跡の聖地としてのあり方は、最初に受容したスコータイ王朝から大きな変容を遂げていることを確認した。

ボードガヤーについては、2つの観点から調査を進めた。1つは、同地に所在する仏足跡である。インド古代初期の仏教美術では象徴表現としての仏足跡は存在したが、以後作例はみられなくなった。しかし、パーラ・セーナ朝に下るとボードガヤーにおいて単独の仏足跡が作られるようになる。それらの造形的特徴を整理し、文様の独自性、同時期のバガンの仏教尊像と造形が類似する点、スリランカの仏教僧による信仰がボードガヤーへ及んでいた可能性などを指摘した。

もう1つは、ボードガヤー大精舎の小型模型に関する調査で、現在23例が確認されているうち5例の調査を実施した。これらの作例では、建築意匠にバガンやネーワール様式の特徴を備えるものがあること、制作地はインドに限られない可能性の考えられることなどを指摘した。

以上の成果を、『東南アジアにおける聖地誕生の諸相 - 古代から近世にいたる仏教文化交流網の研究』(2024)として、報告書にまとめた。

この他、小泉恵英「スリランカの上座部仏教とタイ・スコータイ王朝序論」『アジア仏教美術論集 南アジアII』(2021)、原田あゆみ「スコータイ刻文と仏塔建立: 仏舎利安置と蓮蕾形仏塔」『東南アジア「古代史」の下限としての14・15世紀に関する地域・分野横断的研究』(2023)を執筆、学会発表として、福山泰子「仏教衰退期のボードガヤーの状況とその特異性について」密教図像学会(2022)がある。

なお、コロナ禍の制約のため、ごく限られた期間、地域での調査であったが、タイ芸術局には最大限の協力をいただいた。しかしながら、収集すべき資料は未だわずかにとどまり、信仰の全体像を把握するために、今後も調査を継続していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福山泰子
2. 発表標題 仏教衰退期のボードガヤーの状況とその特異性について
3. 学会等名 密教図像学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小泉恵英、原田あゆみ、福山泰子、打本和音	4. 発行年 2024年
2. 出版社 九州国立博物館	5. 総ページ数 329
3. 書名 『東南アジアにおける聖地誕生の諸相 - 古代から近世にいたる仏教文化交流網の研究』	

1. 著者名 小泉恵英	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 655
3. 書名 アジア仏教美術論集 南アジアII 「スリランカの上座部仏教とタイ・スコタイ王朝序論」	

1. 著者名 原田あゆみ	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京外国語大学	5. 総ページ数 167
3. 書名 東南アジア「古代史」の下限としての14・15世紀に関する地域・分野横断的研究 「スコタイ刻文と仏塔建立：仏舎利安置と蓮蕾形仏塔」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	原田 あゆみ (Harada Ayumi) (20416556)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・課長 (82619)	
研究分担者	打本 和音 (Uchimoto Kazune) (30812309)	京都大学人文科学研究所・公私立大学の部局等・研究員 (34316)	
研究分担者	福山 泰子 (Fukuyama Yasuko) (40513338)	龍谷大学・国際学部・教授 (34316)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------